

国際シンポジウム「世界史のなかのノモンハン事件 (ハルハ河会戦) ——過去を知り、未来を語る——」レポート

ボルジギン・フスレ

ノモンハン事件（ハルハ河会戦）70周年を記念して、2009年7月3、4日の2日間、モンゴル国家文書管理総局、関口グローバル研究会（SGRA）、モンゴル科学アカデミー歴史研究所が共催、在モンゴル日本大使館、アメリカ大使館、ロシア大使館が後援、東京外国語大学、モンゴル国立大学歴史研究院、モンゴル国防省国防科学研究所軍事史研究センター、モンゴル科学アカデミー国際研究所、モンゴル・日本人材開発センターが協力、日本国際交流基金、霞山会、渥美国際交流奨学財団、守屋留学生交流協会、アメリカのアラタニ財団、韓国の未来人力研究院、及びモンゴル国のモンゴル・テレコム（Telecom Mongolia）、ロシア財団NGO（Russian Foundation NGO）、モンゴル・アーカイブズと歴史研究者連合会“On tsag”（“On tsag” association of Mongolian Archivists and Historians）、“Tsom” Consultingの協賛で、国際シンポジウム「世界史のなかのノモンハン事件（ハルハ河会戦）——過去を知り、未来を語る——」が、モンゴル国首都ウランバートルで開催された。

開会の準備のために、SGRA代表の今西淳子さんと、運営委員の石井慶子さんが6月30日に先にモンゴル国に入った。同日夕方に出発した私は、翌日の7月1日午前、ウランバートルに到着した。入国手続きを済ませ、迎えにきたモンゴル国家文書管理総局の職員の車に乗って、ホテルに向かった。しかし、モンゴル国家文書管理総局のD. ウルズィーバータル(D. Ulziibaatar)局長から連絡が来て、ホテルではなく、直接、文書局に来てほしいと言われ、文書局に行くことになった。局長室に着いたら、実行委員長のウルズィーバータル局長、モンゴル科学アカデミー歴史研究所長Ch. ダシダワー（Ch. Dashdavaa）氏が打ち合わせをしていた。また、シンポジウムに参加するイギリス・ケンブリッジ大学教授E. ボラグ（Uradyn. E. Bulag）氏も私を待っていた。

「仕事はいっぱいまっているのに、フスレさんはなぜ自分の上司よりも遅れてモンゴルに来たのか？タベ、私はチンギス・ハーン空港まで今西さんを迎えに行ったよ」とウルズィーバータル局長が冗談を言った。簡単な挨拶をしてから、ウルズィーバータル局長、ダシダワー所長と私は同局の会議室に入った。そこには、文書総局の数名の職員、シンポジウムの通訳の仕事をつとめる英語、日本語、ロシア語の通訳者たちが待っていた。早速、準備会議をおこない、シンポジウムの式典、スケジュール、スタッフの役割などを確認し、通訳たちの分担を決めた。通訳者たちを退出させ、続けて文書総局の職員と会議をおこなった。また、在モンゴル日本、アメリカ、ロシア大使館とも連絡をとった。

15時になって、ウルズィーバータル局長、同局副局長、モンゴル国家中央文書館長

M. エルデネバト (M. Erdenebat) 氏等と私は、文書局となりのレストランで昼食をとった。その後、文書局の西側のTUUSHINホテルで今西さんと会って、シンポジウムの準備の状況について報告した。この日、アメリカから会議に参加し、SGRA会員のアリウンサイハンさんの案内で、今西さん、石井さんは、ウランバートル郊外のザイサン=トルゴイの第二次世界大戦に参加したモンゴル赤軍の記念碑などを見学した。

文書総局で、会議の準備を手伝った後、私は、モンゴル・日本人材開発センターで、Kh. ガルマーバザル (Kh. Garmaabazar) 総括主任と会って、会場、同時通訳設備のセッティングなどを確認した。

20時すぎから、文書局総務課長のチンバト (Ts. Chinbat) 氏が私を、シンポジウム実行委員会が手配したEposホテルに送ってくれた。荷物を片付けてから、昔からの友人、モンゴル反テロ連盟のアドバイザー、J. ダムディンドルジ (J. Damdindorj) 氏と『朝日新聞』のウランバートル駐在員のD. バヤルサイハン (D. Bayarsaikhan) 氏が訪れてきた。二人は、近くのレストランに私を招待してくれた。

7月2日午前9時半、今西さん、石井さん、アリウンサイハンさんと私は、城所卓雄在モンゴル日本特命全権大使閣下に招かれて、日本大使館を表敬訪問した。

城所大使は東京外国語大学モンゴル語科の出身で、イギリス・リーズ大学へ留学したこともあり、外交経験が豊富で、赴任前は、在サンクトペテルブルグ総領事をつとめていた。これまで、在モンゴル日本大使館歴任大使のうち、東外大モンゴル語科の出身者をかぞえると、城所大使は二人目の大使になる。ロシア通のうえに、モンゴル通である。任命の情報がつたえられた今年2月で、東外大モンゴル語科同窓会は、東京で、城所大使赴任のお祝いの会をおこなった。当時、私は、はじめて、城所大使にお目にかかったにもかかわらず、今回のノモンハン事件に関するシンポジウムに対するご支援をお願いし、氏は快諾してくださった。のちに、私がウランバートルに行った際、大使が私のことを覚えていて、カンピンスキーホテルの日本料理店桜に招待してくださった。大使は、シンポジウムだけではなく、日モの文化・学術交流、モンゴルに対する日本政府開発援助ODAの改善、豊かな資源をもつモンゴル国における開発の課題、モンゴルに進出した各国のビジネスの比較などについてお話しされた。今回のシンポジウムにおいても、城所大使が、さまざまな問題を解決し、シンポジウム二日目の招待宴会を大使館公邸で、SGRAと共催でおこなうことにしてくださったのである。

城所大使は、訪問したわれわれ4人に、モンゴルにおける日本の事業、極東地域の政治、社会情勢、モンゴル国と日本、ロシアの関係などを分析し、田中克彦先生の新刊書『ノモンハン戦争：モンゴルと満洲国』（岩波新書、2009年）についても感想を述べられた。今西さんはSGRAや渥美国際交流奨学財団の事業、今回のシンポジウムなどについて紹介し、大使館のご支援に対して、感謝の意を申しあげた。会談中、私は、霞山会山下勝男事務局長の名刺を城所大使に渡した。

実際、今回のシンポジウムの実行にあたって、渥美財団の渥美伊都子理事長、今西さんをはじめ、多くの方々にたいへんお世話になった。渥美理事長、今西代表の積極的なご支持があってはじめて、このシンポジウムを実現させることができたのである。「ノモンハン事件」という敏感な歴史「事件」をテーマにしたこのプロジェクトは、金融危機の影響もあり、日本の国内で資金を得るのが非常に難しかった。幸いなことに、シンポジウム準備期間中、在モンゴル日本大使館、日本外務省中国・モンゴル課、ロシア課から何回も電話がかかってきて、確認や励ましの言葉をいただいた。守屋留学生交流協会理事長守屋美佐雄氏、事務局長西岡隆秀氏がいち早く助成金を送ってくださった。シンポジウムの資金を得るために、渥美理事長とSGRA今西さんは、日本だけではなく、アメリカや韓国の財団まで働きかけてくださった。霞山会はそのうちの一つである。梅雨の今年6月18日、今西さんと私は赤坂の霞山会本部を訪問した。星博人常務理事、山下勝男事務局長は、支援を快く受け入れ、気前よく資金を提供して下さい、たいへん助かった。星常務理事がまた、みずから霞山ビルを案内して下さり、霞山会の歴史、近衛篤磨氏、東亜学院、事務室にかざった貴重な書画作品などを紹介してくれた。その際、山下事務局長に、ウランバートルに行く際、自分の名刺をぜひ城所大使に渡して、「よろしく」と伝えてほしい、と言われた。城所大使にお目にかかるこの機に乗じて、私はこの「使命」を果たした。名刺を受け取った城所大使は「懐かしいな」と言いながら、昔、アメリカのシカゴ総領事館、サンフランシスコ総領事館での仕事にも少しふれられた。お二人は在サンフランシスコ総領事館で勤務したことがあり、前任と後任の関係だったそうである。

城所大使にいとまごいをして、別室で藁谷栄参事官と30分あまりお話した。藁谷参事官も東外大モンゴル語科の出身である。日モ関係、モンゴルの政治・経済動向、伝統文化と工業化への難題、大統領選挙でのエルベグドルジの勝因、モンゴルにおける日系企業の状況などを、冗談をまじえながら紹介して、充実した会見になった。

日本大使館を辞した後、4人は文書局でウルズィーバートル局長、ダシダワー所長と合流し、12時にニュースセンターに着いて、記者会見をおこなった。ウルズィーバートル局長と今西さんがそれぞれ実行委員会のモンゴル側と日本側を代表して、挨拶し、シンポジウムの趣旨と参加者の規模などを説明し、ダシダワー所長は、記者からの質問に答えた。

その後、今西さんと石井さんがTUUSHINホテルをチェックアウトして、Eposホテルに移った。ちょうど、ホテルの1階のレストランで、今西さん、石井さんと私は、一橋大学名誉教授の田中克彦先生とあって、4人で一緒に昼食を食べた。田中先生は今回のシンポジウムはどれほど重要であるかをユーモラスに説明し、楽しい時間を過ごした。

16時に、私たちはモンゴル・日本人材開発センターに行き、中村光夫所長に挨拶し

た。また、各国からの参加者は同センター1階のロビーで、受け付けをおこなった。18時から、東京外国語大学教授二木博史氏、アメリカ・インディアナ大学中央ユーラシア学部教授アトウッド（C. P. Atwood）氏、ケンブリッジ大学教授E. ボラグ氏、今西さん、ウルズィーバータル局長等、そして私も加わって、多目的室で議長会議を開いた。

7月3日、のどかで、あたたかい日だった。午前9時、モンゴル・日本センターの多目的室で盛大な開会式をおこない、モンゴル国会議員、法務内務大臣Ts. ニヤムドルジ（Ts. Nyamdorj）氏、モンゴル科学アカデミー総裁B. チャドラー（B. Chadraa）氏、関口グローバル研究会代表今西淳子氏が挨拶と祝辞を述べた。Ts. ニヤムドルジ大臣の挨拶では、戦略的な視点から、ハルハ河戦争を評価し、研究者たちと率直に話しあって、今後の世界平和と国際的な相互理解を促進したいという意を伝えた。英語で挨拶した今西さんは、同シンポジウムが実現までの経緯、ウルズィーバータル局長との付き合い、田中克彦先生、ゴールドマンさんとの出会いなどを簡潔に述べ、参加者に感謝しながら、ハルハ河戦争をめぐる研究の更なる発展を展望した。続いて、モンゴル科学アカデミー歴史研究所長Ch. ダシダワー教授、ロシア連邦科学アカデミー会員、シベリア支部ブリヤート支局長B. V. バザロフ（B. V. Bazarov）教授、一橋大学田中克彦名誉教授、そして、アメリカのユーラシア・東ヨーロッパ評議会のS. D. ゴールドマン（Stuart D. Goldman）博士が基調報告をおこなった。在モンゴル日本大使城所卓雄閣下、ロシア公使、アメリカ大使館の代表が開会式に出席し、在モンゴルアメリカ大使館M. C. ミントン（Mark C. Minton）大使が途中から参加した。休憩の忙しいひと時を裂いて、今西さんがミントン大使に挨拶し、私も大使に紹介され、一緒に記念写真をとった。ミントン大使は穏やかで、とてもやさしいという印象だった。日本語が流暢で、びっくりした。たずねてみたら、在日本アメリカ大使館で長年勤務したことがあったのだ。

昼には、参加者たちがモンゴルの国会議事堂の前で記念写真を撮ってから、アルタイというバイキングの焼肉店で食事をした。

午後は、東京外国語大学二木博史教授、岡田和行教授、愛知大学法学部ジョン・ハミルトン（John Hamilton）教授、内モンゴル大学チョイラルジャブ（Choiraljav）教授、モンゴル国外務省Ts. バトバヤル（Ts. Batbayar）局長、モンゴル科学アカデミー会員、国立大学J. ボルドバータル（J. Boldbaatar）教授、文化芸術大学学長D. ツェデブ（D. Tsedev）教授、国防科学研究所長B. シャグダル（B. Shagdar）少将、文書総局ウルズィーバータル局長、ロシア連邦科学アカデミー極東研究所長S. G. ルジャニン（S. G. Luzyanin）教授等10人がそれぞれの分野を代表して、大会報告をおこなった。

夕方、モンゴル国大統領官邸のイフ＝テンゲル（Ih Tenger）迎賓館で歓迎宴会を

おこなった。ちょうど雨が降り始めて、今西さんが、昨年のシンポジウムの招待宴会での挨拶の続きとして、たくみに雨を話題に祝辞を述べて、参加者からの拍手喝采を受けた。ウルズィーバートル局長が「今年はもう雨が降らないでしょう。明後日、草原に旅行に行くとき、必ず晴れたいい天気になる」と自信満々で返事をした。宴会中、モンゴルの伝統の歌や馬頭琴の演奏が披露された。在モンゴル日本大使館藁谷栄参事官が招待に応じて出席し、今後のSGRAのモンゴルプロジェクトについて、いろいろ助言してくださった。

翌日の7月4日午前、モンゴル・日本センターの多目的室、ゼミナー室1・2で、「ノモンハン事件（ハルハ河会戦）の真実：多元的記憶と多国間アーカイブズの比較の視点から」「ノモンハン事件に対する理解の国際比較と現状」「ノモンハン事件に関する報道、文学、映画、音楽、美術」の三つの分科会をおこなった。シャグダル（B. Shagdar）少将、二木博史教授、ツェデブ学長、ルジャンン所長、ボラグ教授等が各分科会の議長をつとめた。

夕方、在モンゴル日本大使館公邸で、日本大使館とSGRA共同で招待宴会をおこなった。各国の研究者60名あまりが集まって、城所卓雄大使が英語で挨拶を述べた。研究者たちが乾杯しながら、歓談し、意見交換をした。城所大使はやさしく、参加者の要求に応じて、それぞれと記念写真を撮った。これまで、モンゴル国で、世界モンゴル学会など国際シンポジウムをおこなった際、日本大使館は日本の研究者を招待したことがあるが、各国の研究者と一緒に招待したのは、今回がはじめてだったそうで、たいへん有意義なことだと、日本の研究者だけではなく、海外の参加者からも好評だった。

シンポジウムはモンゴル語、英語、日本語、ロシア語の同時通訳がつき、効果的だった。2日間の会議中、モンゴル、日本、アメリカ、ロシア、イギリス、中国、韓国などの国の研究者が40本の論文（共同発表もふくむ）を発表し、ウランバートルにある各大学、研究機関の研究者、台湾国立政治大学民族学部藍美華教授、東京大学、東京外国語大学の研究者、留学生、中国社会科学院の訪問学者など180人ほどが参加した。会議の影響が大きく、モンゴルのモンツァメ国営通信社、『Udrin sonin（日報）』、UBSなど10数社が報道した。シンポジウムの発表の詳細については、別稿にゆずりたい。

これまで、ノモンハン戦争について、日本、モンゴル、ロシアが数回シンポジウムをおこなってきたが、いずれも各国各自の主催であった。ノモンハン事件をテーマに、日本とモンゴル国の諸団体が共同主催し、同事件に関わった国の研究者だけでなく、世界各国の研究者が集まって、国際学術シンポジウムを開催したことは、今回が初めてであった。田中克彦先生の言葉を借りると、「ノモンハンが軍事にとどまらず、多面的な文脈の中で明らかにされること」が、今回のシンポジウムのもっとも重要なところであった（田中克彦「ノモンハン戦争とは何だったのか、奪われた民族統合の夢」『朝日新聞』、2009年6月25日夕刊）。

7月5日午前9：30、モンゴル国家中央文書館の1階の展示室で、「ハルハ河戦争勝利70周年記念展覧会」に参加した後、10：30時に、各国の研究者たちがバスに乗って、草原にむかった。さわやかで、晴れわたった天気だった。去年と違って、ウルズィーバートル局長が、自分の車をほかの人に運転させて、みんなと一緒にバスに乗った。「ほら、いい天気でしょう」と、先日、招待宴会での挨拶のことをふりかえって、自ら案内した。途中で、カザフ人の集落地、ブスノール、ゾン＝モドなどの地域をへて、雨でできた水たまりの傍で停まった。少し休憩して、ふたたび、出発し、12時前、ツオンジン＝ボルドグに着いた。目の前に、突然、白い色の、巨大なチンギス・ハーン騎馬像の複合建築物があらわれた。

ウランバートルから53キロ離れている、中央県エルデネ＝ソム（「ソム」はモンゴルの行政単位）のこの建築物は、モンゴル建国800周年記念行事のひとつとして、つくられた。世界で最大のチンギス・ハーン騎馬像と誇るこの複合建築物の高さは、円形の基礎部を含んで40メートルあまり、像自体の高さは30メートル、基礎部の高さは10メートルあまりある。建設には、アメリカ、ロシア、チェコなどの国の技術者が参加したそうで、250トンのステンレス鋼材が使われたという。建物は柱に囲まれており、像の中のエレベーターでチンギス・ハーンが乗った馬の像の頭までのぼることができる。基礎部には博物館、展示ホール、レストラン、カフェ、会議室、土産物店などがある。建物の周辺には、800のゲルを建てる予定で、工事はまだ続いている。

チンギス・ハーン騎馬像の複合建築物は「13世紀の金のむちの総合施設」ともよばれている。1177年に、チンギス・ハーンがこの地域の丘でむちを見つけたという物語がある。この物語にもとづいてつくられたこの像と一緒に、チンギス・ハーンが握ったむちを金でつくったのである。

建築物の中に入って、みなエレベーターではなく、階段でのぼることにした。下から上までのぼるのは、けっこう時間がかかった。馬の像の頭についたら、大草原が一望のもとに見わたせた。

皆バスに乗って、さらに東に向った。30分ほどで、文書総局の職員たちが待っていた美しい草原のキャンプに到着した。ここで草原の宴会をおこなった。モンゴル式の前菜のあと、モンゴルの伝統料理ホルホグ（行宮焼）が運ばれてきた。ホルホグは羊肉をじゃがいも、人参、キャベツ、塩などを大きな缶に入れ、さらに焼けた石とを交互に詰めて、石焼き（蒸し）とした料理である。

みな、くつろいで、ホルホグを賞味しながら、歌を歌い始めた。田中先生がロシア語でロシアの歌を歌ったら、韓国東亜大学校社会科学学院長の韓錫政（Suk-Juun Han）先生もロシアの歌を、ゴールドマンさん、アトウッドさん、ジョン・ハミルトンさん等も自分の母語の以外の言語で歌を歌った。ここで、モンゴル国とロシアの研究者が負けるわけではないから、若手研究者も、将軍も、絶え間なく、歌った。日本語教師の

経験がある石井さんがウルズィーバートル局長に日本語の挨拶語を教えた。

宴会の後、みなゲル（モンゴルのテント）から出て、ウルズィーバートル局長をはじめ、相撲はじめた。アトウッドさん、内モンゴル芸術研究所のハダバートルさん、SGRA会員のヤロスラヴ・シュラトフさんも参戦した。

それと同時に、一部の研究者が馬に乗って、草原の風景を満喫しながら、のんびりと大自然のそよ風を楽しんだ。今西さんと私も馬に乗って、文書総局の職員と遊牧民の少年と、草原を「駆け巡った」。途中、家畜の群れをみかけて、おいかけてもいいかと聞いたら、「時間はまだ早いけど、すこし追いかけてもいいよ」と答えたので、私たち4人は家畜の群れを追いかけて、夜の牧場に近いところまで移動させた。

夕日のなか、もどって来ると、夜の宴会が始まった。今回は、ヤギのボードグだった。ボードグとは、ヤギの内臓を取り出し、中に焼いた石を入れ、外側の毛をすべて焼き落としたヤギの丸焼きである。みな、ボードグを賞味し、歌も、ウォッカも欠かせなかった。

草原から離れたくなかったが、時間になり、日が沈むとき、皆、帰りのバスに乗った。夜のとぼりのなか、バスのなかでは、歌とウォッカが続いていた。

翌7月6日、今西さんと石井さんが夜明け、6:25のMIATモンゴル航空OM225便に乗り、北京で日本航空に乗り換えて、日本にもどった。私は朝食の後、まず、ウランバートル市内のジュコフ記念館にいった。その後、東外大教師上村明氏のご好意で、モンゴル軍事博物館で二木先生、上村先生と合流し、軍事博物館を見学した。11時に、私は軍事博物館を後にして、文書総局で、シンポジウムの後始末をした。

午後、田中先生、二木先生、細川呉港さん、シュラトフさん、千葉大学の児玉香菜子さんと私が、Eposホテルのロビーで集合し、文書総局の車でチンギス・ハーン空港に送ってもらった。空港で、ゴールドマンさんが私たちと合流して、出発時刻より1時間遅れて、18:30にチョイバルサン行きのモンゴルEznis社のZY909便は離陸した。

そもそも、去年6月におこなわれたシンポジウムの閉会式の後、今西さんがウルズィーバートル局長、ダシダワー所長と草原で歓談した際、みな、2009年のハルハ河戦争のシンポジウムの後、参加者たちと、ハルハ河まで行くことも考えていた。残念ながら、今年は雨が多く、ハルハ河まで行く湿地の条件が厳しくなって、時間的にも難しく、さらに、ほかの原因もあり、ハルハ河行くことをあきらめざるをえなかった。結局、参加者のうち、私たち数人だけがチョイバルサン市およびその周辺の草原を目的地とするエクスカーションに参加することになった。

Eznis社は2006年に成立されたモンゴルの民間航空会社である。夏、ウランバートルからチョイバルサンへ週3回飛ぶ。私たちが乗った、ZY909便の飛行機はスウェーデンのサーブ社とアメリカのフェアチャイルド社が協同開発したサーブ340（SAAB340）である。30数人乗れる小さな飛行機であるが、軽便で、離着陸の性能も

優秀であるといわれている。飛行機に乗って、たしかに、穏やかで、落ち着いた感じだった。乗務員が1名で、英語とモンゴル語両方で案内していて、軽食と飲み物のサービスもわりによかった。飛行機のなかで当日の新聞を読んだら、シンポジウムで、岡田和行先生に対するインタビューが掲載され、写真もあった。

1時間40分で、ZY909便はドルノド県庁所在地チョイバルサン市の空港に到着した。ドルノド県司法部長のD. モンゲンツェツェグ氏、ドルノド県文書館長L. ビャンバツェツェグ氏と運転手が迎えに来ていた。そこで、私たちは在アメリカモンゴル大使館に依頼した案内の人が迎えに来ていたゴールドマンさんと別れた。

モンゲンツェツェグさんが自分の日本製の車を運転して、田中先生、シュラトフさん、児玉さんを乗せて、男の運転手が別の日本車で二木先生、細川さん、ビャンバツェツェグさんと私を乗せた。途中で、運転手に、ドルノド県に外国人がいるかどうかを聞いたら、「いっぱいいるよ。漢人、内モンゴル人、ロシア人、日本人、カナダ人、韓国人…」と答えた。70年前、日本・満洲国連合軍とソ連・モンゴル連合軍による大規模な国際紛争が、この県とフルンボイル国境沿いのハルハ河地域で起きたのである。社会主義時代、ドルノド県にはソ連の駐屯軍が駐在し、重要な軍事基地であった。冷戦後も、一部のロシア人が残っており、最近、ウラン鉱床の開発をめぐって、中国などの国から多くの商人、労働者がやってきて、観光客も少なくないという。資料によって、データがことなるが、約5万人が住んでいるという。途中で廃棄線になった鉄道をみかけた。二木先生は、中国の地図では、チョイバルサンからいくつかのところに行く鉄道があるが、実際はすでに廃線になっていると指摘された。

ドルノド県の接待側は、私たちを同県の、もっとも新しいホテル East Palace に宿泊させた。入ってみたら、確かにきれいで、条件がいい。一階では、インターネットもつかえる。ロビーに何人かの中国人が座っていて、駐車場には、中国ナンバーの車が停まっていた。

時間が遅かったので、私たちはホテルの1階のレストランで夕食を食べながら、民族・言語・文化について議論し、翌日の計画も立てた。

翌日、朝食をしてから、2台の車にガソリンを満タンに入れて、外貨両替のため、私たちはまず近くの銀行に寄った。銀行から出たところで、車でモンゴルの添乗員と一緒にハルハ河にむかって、6日間の旅を始めるゴールドマンさんと会った。日本から来た私たち6人は3日間の滞在時間しかなかったため、二木先生が提案した、ドルノド県西部のフルンボイル＝ソムに行くことにした。売店で、飲み物やお酒、ボルツグ、そして、訪問先にさしあげるお土産などを買って出発した。今回は、田中先生、二木先生、細川さんと私がモンゲンツェツェグ部長の運転する車に、シュラトフさんと児玉さん、ビャンバツェツェグさんが別の男の運転する車に乗った。この車は、かなり速く、すぐに姿が見えなくなった。モンゲンツェツェグさんの車の方が立派だったが、安全運転第一という方針で、いつも、遅れていた。

モンゲンツェツェグさんが、まず、私たち4人をチョイバルサン市西部にある、10年前、すなわちハルハ河戦争60周年に記念してつくられた記念碑のところに連れて行った。馬に乗って、刀をふるっているモンゴルの騎兵の彫刻がそびえているおり、記念碑を環のように囲む、ハルハ河戦争を題材とした壁画がある。碑の両側には、ハルハ河戦争で使われていた戦車と装甲車がおかれている。壁画の内容を確認した田中先生は、「壁画に描かれている戦士のなか、ソ連兵の姿がまったく見られない。これは興味深いところだ」と指摘された。これは社会主義時代に、ウランバートル市郊外のザイサン＝トルゴイで造られた、第二次世界大戦の記念碑の壁画と対象的である。

車を、記念碑のさらに西に停めて、私たち4人は、廃棄された旧ソ連軍の基地を見学した。西側にソ連兵をイメージした像が倒れていて、東側には、レーニン像が立っているが、風に吹かれ雨に打たれ、ぼろぼろになっている。建物が撤去できず、やぶれたれんが、かわらがみだれていて、缶、ビンなどがちらばっている。完全に廃墟になったこの旧ソ連軍の基地は、環境にどれほど悪影響を与えるか計りしれない。『草原のラーゲリ』と『ノモンハンの地平』を書いた細川さんが遠くまで歩いて行き、インスピレーションが得られたのか、何かを考えているように見える。

車に乗って、前の車を探しに行った。ヘルレン川にかけられた橋の前で、やっと、私たちを待っていた前の車が見えたので合流した。しかし、車が出発したとたん、その車の姿はまた見えなくなった。草原は平坦であるが、車はそれほど速く走れない。地図では、道があるが、実に走りにくい。車より、馬に乗ったほうが楽のように思われる。

バヤントウメン＝ソムをへて、モンゲンツェツェグさんが携帯で前の車と連絡して、私たちと合流し、草原で休憩することにした。大草原は見わたすかぎり果てしない。日がうららかで、軽い風に吹かれて、気持ちよかった。このような草原の旅でお酒を飲むと、ほんとうに疲れをとる。シンポジウム期間中お酒を飲まなかった私は、このとき、モンゴルのウォッカを飲んだ。

ちょうど、私たちが休んだところの北に、古い塔のような建物がかすかに見える。それは遼の時代につくられた有名な塔だと、モンゲンツェツェグさん等が教えてくれた。見に行こうと思ったが、実際は、かなり遠いといわれて、行くのをあきらめた。

出発して、スピードが速かった前の車がふたたび見えなくなった。車はずっとヘルレン川にそって、走っていた。午後2時を過ぎて、前の車をさがしているうちに、あるゲルの前に車をとめて、道をたずねたら、偶然にもゲルの主人はまさに、私たちの今回の旅でさがしている、フルンボイル＝ソムの長老ノロブ氏だった。

第二次世界大戦終結後の1945年秋、ヤダムスレン・シャーリーボー氏がフルンボイルのシネ＝バルガ左旗の約1000人をつれて、時のモンゴル人民共和国に亡命し、ドルノド県でフルンボイル＝ソムを作ったことはすでによく知られている。そのプロセスについて、シャーリーボー氏とナムスライ氏共著の『ドルノド＝アイマグのフルン

ポイル＝ソム建設の歴史記録』にくわしいので、ここでは繰り返さない。今年3月19日の『朝日新聞』の「ノモンハン事件」に関する記事にも、シャーリーポー氏に対するインタビューが掲載されている。シャーリーポー氏は、今年99歳の高齢で、モンゴル国の土で永眠した。

前の車と連絡をとって、皆、ノロブ氏のゲルに入った。ここで、私たちは、迎えにきたフルンポイル＝ソムのわかい女性のソムダー（ソムの長）にもあった。ゲルのなかには、子供たちがナーダムの競馬で、優秀な成績を収めた証明のメダルが数枚かざられていた。先日のソムのナーダムでも、氏の孫が競馬の試合で優勝した。ノロブ氏は今年92歳で、シャーリーポー氏について、モンゴル国に逃げてきた1945年の当時は、28歳だった。ハルハ河戦争が起きた1939年、氏は22歳だったが、直接、その戦争に参加しなかった。氏は、モンゴル・ソ連連合軍に投降した満州国軍のなかのモンゴル人、ダグール人兵士のことについて、知っていた。田中先生、二木先生が、1939年、1945年のことについて質問した。私が郭文通のことについて聞いたら、氏は「(満州国軍)騎兵第7団長の郭文通のことなら、知っているよ。彼はダウール人だ」と答えた。私は、また、当時、満州国と蒙疆政権のモンゴル人の間で盛んになった「チンギス・ハーンの軍の歌」について聞いた。氏は少し考えて、歌い始めた。

ノロブ氏のゲルを辞去して、車で、少し離れた次の住民、今年74歳のアラブダン氏に訪ねた。アラブダン氏の家はあきらかにゆたかである。国から「国家獵師」「模範遊牧民」などの称号が与えられた、いわば横綱級の獵師である。3人の息子は地元の有名な力士で、その内のひとりが、先日のナーダムの相撲の競技で優勝したそうである。ゲルの中にさまざまなメダルがいっぱい飾られている。3人の息子は、それぞれ1000頭以上の羊を飼っている。家族全員の家畜をあわせると、5000頭も超えているという。インタビューしていると、ヤギの丸焼きのボードグを出してくれた。ここで、みな満腹して、ソムの所在地におもむいた。

ソムの所在地に着いてから、ソムの長は事務室で、まず簡単に私たちにソムの歴史を紹介してくれた。その後、別室でソミヤー（82歳）、ダワー（87歳）、マジグ（85歳）とダルマー（82歳）の4人の長老に紹介された。モンゴルのボーズ（肉饅頭）、サラダ、キムチなどが出されて、私たちは食べながら、4人の長老にいろいろな質問をした。

私たちは4人の長老にお土産を渡して、一緒に記念写真を撮って、日が沈む前に、帰りの道に就いた。男の運転手の車が相変わらずはやかった。かれらは車で丘にのぼったり、野生動物を追いかけていたりしていた。

夜23時、私たちはEast Palaceホテルにもどった。ホテル1階のレストランで、6人が話しながら、ビールを飲んだ。

7月8日、私は朝早く起きて、あるいてチョイバルサン市の町の風景をみようと思

ったが、1階のレストランで、散歩して戻ってきた田中先生と会った。先生はもっと早く起きたのである。私は外出するのをやめて、田中先生のお話を聞きながら、朝食をした。田中先生は、いきいきとして、イメージ豊かな表現で、今回のシンポジウムについて、感想を述べ、高く評価してくださった。

午前10時、私たち6人が昨日と同じように車に乗って、ドルノド県の民族歴史博物館に見学に行った。民族歴史博物館は、昨日、私たちが訪れたハルハ河戦争勝利記念碑の北側にある。博物館の前にはチョイバルサン像がそそりたっている。その西側には、爆撃を受けた車、大砲などが展示されており、芝生の上に、赤い色の石を積んで、モンゴル語で「ハルハ河39」とかかかれている。

博物館のなかには、「自然」「歴史」「文化」「民族」「ハルハ河戦争」「チョイバルサン元帥」「現代」などいくつかのコーナーを設けている。有料で、撮影は許された。職員の話によると、1946～47年につくられたこの博物館の建設には、日本軍の捕虜も参加したそうである。

博物館を離れて、車でチョイバルサン市内の、1939年当時、日本軍の爆撃機に爆撃された場所に行った。爆弾に爆撃された跡とはいえ、着いてみたら、唯一の記念物は爆弾の彫刻であって、説明や文字などなにも書かれていない。そのすぐそばにバスケットコートがあって、子供たちがバスケット・ボールで遊んでいた。

そこから、ジュコフ博物館に行った。意外にも、倉庫のような小さな小屋である。なかには、写真や油絵、数種の武器の模型、彫刻、戦場を背景にしたジオラマなどにより構成されている。ジュコフ司令官はここでソ連・モンゴル連合軍を指揮したことがあったため、この遺跡を博物館にしたのである。しかし、教えてくれなかったら、ここは博物館だと誰も思わないだろう。

正午、私たち6人は、運転手が薦めてくれたヘルレンホテルの2階のレストランで食事をした。その後、本屋に行って、二木先生はたくさんの本を買った。それからドルノド県文書館を見学した。ハルハ河戦争に関する資料はけっこう保存されている。

その後、私たちは、市内の一番高い丘にのぼった。そこには、オポーがあって、オポーの前の大きな石に、モンゴル建国800周年のとき刻んだ地図もあった。ここから、チョイバルサン市の全景みられ、想像より広がった。そこから、遠いところになんらかの建物が見える。モンゲンツェツェグさんに聞いたら、モンゴル軍の基地だと教えてくれた。

そこからおりて、さらに、ヘルレン川に行った。途中、教会の建物も目にした。ロシアの影響は強く感じられる。ヘルレン川に着くと、モンゲンツェツェグさんが「まず、川に私たちが持ってきた食べ物をささげたら」と言ったので、私はそのようにした。昨日、ずっと河にそっていったので、静かだとおもったが、実際にそばにたつと、ヘルレン川の勢いが感じられる。

川のそばで、みな乾杯して、簡単な夕食をおいしく食べた。田中先生は「ここにき

てよかった」と、1939年の歴史を振り返った。言葉は短かったけれども、意味は深長であった。

私たちが自分でつけた場所をきれいに片づけて、荷物も車に積んだ。その後、チョイバルサン市東南部の旧ソ連の空軍の記念碑にいった。四方を見わたしたら、三つの旧ソ連軍の駐屯地の址がはっきり見えた。

6時前、私たちは、チョイバルサン市の空港に向った。ZY910便は19:30時に予定どおり離陸し、ウランバートルのチンギス・ハーン空港へ飛んだ。

★筆者が撮影したノモンハン・シンポジウムとチョイバルサン旅行の写真は下記URLよりご覧いただけます。

<http://www.aisf.or.jp/sgra/photos/index.php?spgmGal=Mongol%202009%20by%20Husei>

★このレポートは、若干の加筆修正後『日本とモンゴル』（社団法人 日本モンゴル協会）に掲載される予定です。